

山本博士  
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

# 經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉  
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

## 目 次

<p>尙書の虞夏書に見はれたる經濟思想</p> <p>酒の專賣に就きて</p> <p>マールクスの認識論原理</p> <p>植民の世界史的意義</p> <p>農業生産<small>に於ける</small>水平的分化と垂直的分化</p> <p>我國工業<small>に於ける</small>小企業の殘存<small>に関する</small>一研究</p> <p>資本蓄積率の差異と固定資本</p> <p>中央銀行兌換準備檢討</p> <p>貨幣需要と貨幣の流通速度</p> <p>植民地時代米國の土地保有制度</p> <p>米國の對馬投資とその影響</p>	<p>法學博士 田島 錦治 一</p> <p>法學博士 神戸 正雄 二四</p> <p>文學博士 米田庄太郎 四四</p> <p>文學博士 高田 保馬 五五</p> <p>經濟學士 八木芳之助 六八</p> <p>經濟學士 大塚 一朗 一〇七</p> <p>經濟學士 柴 田 敬 一二三</p> <p>經濟學士 松岡 孝兒 一三〇</p> <p>經濟學士 中 谷 實 一三六</p> <p>經濟學士 堀江 保藏 一四九</p> <p>經濟學士 長田 三郎 一五七</p>
---	---

免稅點以下の小額所得者	經濟學博士	汐見三郎	三四
經營學の基礎概念たる資本、企業及經營	經濟學博士	小島昌太郎	三六〇
世界科學に就て	經濟學博士	作田莊一	三七六
漁村更生策に於ける問題	經濟學士	蛸川虎三	三九五
人口粗密の原因觀	法學博士	財部靜治	三五
徳川時代における植民的思想	經濟學博士	本庄榮治郎	三九
ヘーゲル市民社會論と經濟學	經濟學博士	石川興二	三四九
恐慌と蓄積と植民	經濟學博士	谷口吉彦	三六九
北海道鯨漁業に現存の漁場貸借關係	經濟學士	岡本清造	三九四
我國に於ける植民政策學の發達	經濟學士	金持一郎	四一七
クレルウキアに就いて	農學士	若木禮	四四〇
山本美越乃博士年譜及著書論文目錄	經濟學士	高木眞助	四七七

# 植民の世界史的意義

——貧しきものは必ず勝つといふこと——

高 田 保 馬

—

全體の目ざすものはつねに部分の目ざす、又意識せざるものである。部分は其目ざすところに向つて進むうちに、結局はその目ざさざりしものに歸着してゆく。生命は成長を求めて死滅する。身體の細胞は相互に争闘して、其結果、相共に發達する。所謂理性の狡智と云ひ、目的異質の原則と云ふものは、皆これをさす。有史以來、植民の努力は不斷に行はれつゝある。若しこれをあまりに超歴史的なる見方をするものであると云ふならば、次の如くに云はう。資本主義國家はすべて植民的活動をつゞけつゝある。此植民的活動と云ふのを、資本による自國の政治的優勢の利と云ふことに解することと約束して置かう。これが植民的活動の嚴密なる意義であると主張するやうな意圖は少しも私にない。定義は效果の問題である。何れにせよ、植民は自國の富強の爲に、若くば自國の資本の蓄積を容易にする爲になされる。而もそれはやがて自己の衰滅を、弱者による強者の克服を伴ふ。云ふまでもなく、植民はつねに一面から見ると、優秀なる文化の擴充を

意味してゐる。低い文化の民族はつねに優れたる文化をもつものの植民的活動によつてのみ、文化の高い段階に引き上げられてゆく。けれどもこゝにはさう云ふ一面に立入らうとするのではない。

社會の進化の内容は一面より見るとき、常に弱きものが勝つ、と云ふ一の命題に縮約せられ得る。かつて、貴族階級の衰頽消滅の必然的傾向を論證したるジャコビは、自然は平等を好むに似たりといつた。私は此傾向を更に國內に於ける階級のみではなく、更に都市と農村、文化の發達したる民族とその十分に發達せざる民族などの相互關係について述べたることがある。<sup>1)</sup>それはすべて人口の自然的増減に關するものであつた。此自然的増減の大勢に於て、貴族乃至支配階級、都會、文明國は人口減少するか又は増加の勢にぶく、而してこれに對して弱者の地位に立つもの（被支配階級、農村、文明の遅れたる國々）が著しく増加する。云はゞ強者の地位にあるものは早晩其地位を弱者のあるものに譲らねばならぬこととなつてゐる。このことを私はかつて、若干の統計資料を基礎に置きつゝ主張した。

今、考察を單に人口學的のものに限ることをやめて、更に廣き見地から考察してみよう。國內の階級間の關係については、近時格別に注目をひくに至つた見解がある。それはヴィルフレド・パレートの選良の周流の法則である。この見解は上層の階級のやがてに没落して、下層の階級のあるものがこれに取代ることを主張するものである。此過程の何故に必然的であるかについては、

1) 社會學的研究、大正七年刊、130—133頁。

別に分析を加ふるところはない。たゞ本能的傾向の複合とも見るべき殘基（不變性、恒常性などとも résidu ——これが性質それから派生せられたる派生體、イデオロギイ的なるものとしての derivation との對立によりて説明せられてゐる）が階級によつて分布の状態を異にすること、殘基の差異が如何に革命と密接なる聯絡を有するかと云ふこと、これらが今の點に聯關して明にせられてゐる。同様な階級周流の問題は、極めて未熟なるものではあるが、私もかつて、『階級考』のうち、可なり詳しく取扱つた。こゝには深くそれに立入らうと思はない。けれどもただこれだけのことを述べたい。同一社會の内部の階級間には、如何なる原因が作用してゐるにせよ、とにかく、歴史は貴族の墓場であり、上層の階級は漸次に没落する。社會を異にするものの間、即ち民族相互の間に於ても、また同様な意味の周流が行はれなかつたであらうか。又行はれつゝないであらうか。私は人類の進化の全體を通じて、此問題に答へようとするのではない。たゞ資本主義の植民的活動の中にかゝる階級周流的なる意義を汲みとり得るのではないかと考へてゐる。取扱ふ内容が直ちに、資本主義社會の經濟そのものにつらなるのはこれが爲である。

パレートの社會學が今日ファシズム理論の重要な一基礎をなしてゐることは周知の事實である。此點については土方成美博士著『ファシズムを參照せらるることをもとむ』此選良周流の理論のみについて云へば、其叙述が十分に組織的であるといひがたく、社會的勢力の分析に於て缺くる所があり、從つてその上層階級概念も極めて漠然たるものである。能力と地位とに於けるそれぞれ二の優越の混同がないかとすら考へる。要するに、階級の周流に關するパレートの見解は決してまだ十分なるものと許しがたい。

- 2) Vilfredo Pareto, 'Traité de Sociologie Générale, Volume II 1919' 2025—2050. pp. 1293—1305. 松本潤一郎氏、社會學說研究、368—444頁、パレト社會學に於ける社會選良の周流參照。  
 3) 階級考、初版大正十二年、215—288頁、改版大正十四年、147—194頁。  
 4) Pareto, op. cit., p. 1304.

なほパレートの一般社會學について。前掲のものはその初版の佛譯である。遺著として公刊せられたる其再版は一九二三年、三卷となつてゐる。二六一二頁の大部、其晩年の心血を傾け盡したるものである。

## 二

經濟的なる關係はすべて利益の關係であるし、而も相互の利益の爭奪が其間に行はれてゐると見られてゐる。事象の表面を見る限り、それは誤つてゐない。經濟は畢竟優勝劣敗の過程である。中小の資本は大資本の爲に克服せられ、無産者は資本の爲に壓迫せられる。けれども、此經濟、然り、賣買と交換との間にもなほ、隠されたる過程がある。それはつねに、弱きものの勝たうとする勢である。例へばある海の表面は東に流れてゐても、その底の流れ、従つて潮のまことの動きは西に流れることがある。同様に、表面には優勝劣敗だけがめにつくけれども、經濟の動きのまことの姿は弱きものの勝利ではなからうか。此底の流れをたゞ一例について見よう。

金本位制度が停止せられ、銀行券が不換紙幣となるに及べば、此紙幣は大抵金に對して減價すると共に、一般商品に對しても減價する。前者、即ち特殊的減價は、後者即ち一般的減價と決して其率を一にしない。多くの場合に於ては、前者が大にして後者が小である。換言すれば、爲替相場低落(受取勘定に於て)の割合よりも、物價騰貴の割合の方が大である。その結果として、此不換紙幣國は、少くも當分の期間、貿易の點に於て極めて有利の地位に立つ。金を標準として見たる國內の物價は割安であるから、輸出は促進せられ輸入は阻碍せられる。今まで多くの不換紙幣國

がその不利なる經濟的地位に拘はらず、よく輸出入の均衡を保ち得るのは、かゝる事情によると見られてゐる。此最も手近き例證は最近の金本位離脱後に於ける英吉利及び日本である。ことに日本の今年初め頃の事情について見よう。爲替相場場の下落、即ち圓の對外價値の下落は六割に及んだ(爲替二十弗内外)。圓の對内價値の低落、云はゞ物價の騰貴は二割内外のものであつたらう。今日に於ては此開きが著しく縮められてはるやうが、やはり可なりの大きに留まつてゐる。北米合衆國にとつてはさうでない。その金本位離脱以來、その最も重要な取引先である英國との關係について見るに、あれだけ爲替下落の努力を拂つたに拘はらず、爲替の下落は内割にして(磅の底値三弗五十仙を基準として)約四割、さうでない算出の仕方によると約三割である。金に對して見ても約三割の低落と思はれる。價格の騰貴は商品の種類によつて著しく區々であるけれども、一般物價水準の騰貴はこれよりも大であることは争ひ難い。即ち北米合衆國は金本位離脱によつて國內物價引上の目的を若干達し得たにしても、それによりて對外貿易上、有利なる地歩を獲得したとは云ひがたい。金本位離脱によつて受け得らるる一般的利益に均霑することが出来なかつたとも云ひ得る。日本の得たる所を北米合衆國の得なかつた理由は極めて明白である。經濟的に見て、前者の弱く後者の強きが故である。見えざる力は作用して弱きものを有利ならしめ、強きものを不利ならしめる。日本は匡救豫算に基く赤字公債によつて財政の前途を危まれ、又滿洲上海の事變によつて財政不安が愈々加はるものと見られ、加之、聯盟脱退によつて其國際

的地位が悲觀せられた。これらの事情の爲に、日本の爲替は豫想以上に低落した。勿論、貿易業者金融業者の試みたる資本流出の努力の影響もまた看過すべきではないであらう。これに反して北米合衆國の爲替相場は、その國內の物價騰貴にも拘はらず、その經濟的實力に對する信頼の故に、又有利なる國際貸借の故に、低落の程度が比較的の小である。國際經濟的信用の差異が爲替の低落の上にかゝる差異を生じたのであると云ひ得る。金本位離脱は北米合衆國の貿易上の地位を改善せず、或は若干之を低下せしめる、それは強きが故である。日本は貿易上の地位を改善したが、それは弱きが故である。

茲に述べたところは、米國が金の買入價格を引上げ爲替低落の競争に於て挑戰的態度に出でたるに拘はらず、國內物價の引上にそれがさして役に立たぬと云ふ最近の事態に説き及ぶものではない。此人爲的方策のまことの結果如何は未だ明になり得ない所の將來のことからである。これに附帶して、大戰當時を考へる。日本の物價は十五割も騰貴したるとき、金の騰貴は一割餘り(一匁の地金價格五圓七十錢)であつた。勿論、外國も不換紙幣國となつてゐる場合に於ては、對外價値の低落と金紙の開き(特殊的減價)とを同一視すべきではない。けれども、金紙の開きのかくまで小であつたことは注目し値する。これは當然、世界を通じての金の價格の低位にあつた事に原因するであらう。而も、このことが世界を通じて金本位からの離脱の行はれたことの結果ではなかつたらうか。此事情を考へると、近き將來に於て若し、殘存する金本位國がすべて金本位を離れることがあるとするならば、金の價格が今日の高さを(例へば日本に於て、英國に於て他の商品價格と對比せしめてみる場合)維持しうるか如何。そこに問題が残されてゐると思ふ。この點についてはまだ、何等の考察をも下し得てゐない。ただ問題を掲げて後日をまつ。

弱きものの打ちかつ過程は植民的活動に於て更に顯著である。資本主義生産の發達は、周知の如く、ある段階に達するや、販路の狭小に苦しむ。この困難を打開する爲には新しき販路、従つて新

しき市場が開拓せられねばならぬ。此開拓を最も有效ならしむる爲に政治的優勢が利用せられる。かくして商品の輸出が多くは文化の未だ十分に發達せざる地域に對して行はれる。けれども單に對等なる賣買交換を行ふのみにて、かの困難は十分に救はれ得るであらうか。なるほど資本主義商品は買取らるるにしてもまた對價が受取られねばならぬ。これが國內の生産物の販路を狭小にしないであらうか。資本の利害から見れば、かうである。相手から買取るものは、多くは原料である。これを低い價格に於て買取る。勿論ある場合には無償に近き價格に於て掠取する。自己の生産物を高く賣れば、顯著なる利潤を收め得る。原料の生産者は國內に於ける第三者（資本家でも労働者でもない）である。其没落は深く顧みるところではない。たゞ買手即ち植民的活動の受身の側が其生産物を以て、また其貨幣を以て資本主義的商品を買取りうるのには一定の限度がある。資本の蓄積は進行する。それゆゑに新なる方法がはじまる。即ち資本そのものの輸出、及びこれに伴ふ資本財の輸出である。かくして一方資本主義は其資本蓄積の過程を障礙なく進行する。而もこのことは如何なる結果を生じてゆくであらうか。

資本主義國自體に於ける事態の進行。前述の過程が失敗なく進行するときには、國民所得、別して資本利潤が間斷なく増加する。國民所得の増加する場合、労働所得がこれに比例して増加するとは云はれ得ないけれども、勢力關係が與へられたるものである以上、やはりある程度まで増加してゆく。このことは植民的活動に於て成效したる國に於けるほど顯著である。英吉利の労働

者が勞働貴族の名稱を與へられたのは其著しき一例である。資本家の利潤が増加し、其生活程度がずんずんと高まりゆく場合に、勞働者の生活のみが愈々低下すると云ふことは、あり得なかつたのである。少くも一八五〇年から大戰前に至るまでは、勞銀が極めて徐々ではあるにしても實質的に見て騰貴したる時代である。或は此實質的騰貴を以て、勞働者の團結の作用に歸するものもある。それはさうであつてもよい。利潤の増加が此團結を刺激し助長したとしたならば、勞働所得の増加は畢竟、種々なる段階形態に於ける植民的活動の結果であらう。

資本主義國自體に於ける事態の進行の他の一は、資本主義文化の國內に於ける浸潤である。資本主義は一方に於てあくまで合理主義であり、理知打算の上に立つ。他方に於て、それは賣買の原理の上に立つものであるが、賣買に於て人人はあくまで對等者としてたち、人格の全部を保留して僅に物財そのものを交渉せしむる態度をとる。後者は人人の社會的關係を直接に對等なるものと見せしむる傾向を養ふ。賣買の交渉の頻繁なるだけ此作用は助長せらるるであらう。合理主義の態度が人間の關係に及ぶとき、人人は盲目的に、自發的に從屬しまいとする。たゞ與へらるる範圍に於て與へようとする。云はゞ交換の原理がすべてを支配するに至る。民主主義政治はこの傾向の一表現たるに過ぎぬ。民主的氣風は資本主義文化の一性格である。

加之、資本主義文化の最も重きを置くところは自然の克服である。知識は力である。此知識によつて自然は克服せられ、生活内容は高められ生活様式は利便を加へた。けれども、此過程が進

めば進むほど、自己は愛惜せられる。危険はさけられ、困難は遠ざけられる。安逸と快適とが増加する。私は今日といへども、重工業労働者の労働の苦痛の如何にはげしきかを知らぬわけではない。たゞこのことが少くも資本家について云はれうるし、而してそれが資本主義文化の基調をなすこと、この基調が漸次に社會一般の風潮をなすことを知つてゐる。

### 三

節を更めて、植民的活動が受身の側に如何なる結果をもたらすかを考へよう。此受身の側にあるものの最も定型的なるものは所謂植民地である。そこには甲資本主義國の政治的優勢が受身の地域團體（國家又は屬領）を自國の資本の爲に利用するばかりでなく、他の資本主義國の勢力即ち同様なる態度を排除してゐる。けれども植民的活動は必ずしもかゝる排除にまで到達するものではないであらう。隣邦支那に對する各列強の以前の態度の中にはかゝる排除の要求はあつたにしても、排除は實現せられなかつた。それにも拘はらず、各國の政治的優勢は自國の資本を後援してこれを有利の地位に立たしめてゐる。その限りに於て、支那は各國の植民的活動のはげ口、集中點であつたとも云へる。此考方をおし進めるならば、日本に於てすら、かつては植民的活動が試みられたと云ひうるであらう。

さて、受身の側に於ける影響も大體に於て二である。一はその經濟生活に於ける影響。資本主義國からの商品の輸入は新しき世界を教へた。例へば日本にはじめて、鐵砲や時計や眼鏡や、硝子

が輸入せられたとき、我等の先代の人たちは如何なる態度を以てこれに對したであらうか。私は久能山の東照宮に於て家康の遺物を見、その中に眼鏡、鉛筆、時計を認め得たるときに、彼の老英雄の胸中に湧き出でたる小供の如き好奇心、究理欲を想望して微笑することを禁じなかつた。

それは何れともあれ、商品の輸入によつて芽生へたる究理欲乃至摸倣の要求に對しては更に新しき資料が與へられる。資本財の輸入によつて種々なる生産の設備が調達せられる。これと共に新しき技術、新しき科學が取り入れられる。勿論摸倣、習熟の爲には相當の歲月が必要とせらるるであらう。けれども早晚、時が來らなければならぬ。資本輸入の十分に行はれたる後に於て、受身の國、云はゞ後進國に於ける生産の設備が十分に發達する、これを運用する技術もそこで十分に習得せられる。種々なる方面に於ては、新なる生産方法の發見すらもそこで漸次に行はれる。

他の影響は資本主義文化の浸潤である。資本主義國自體內に於て、支配階級の文化である資本主義文化が下層にまで浸潤するが如く、頻繁なる交通、密接なる接觸、及び強者のもつ威光の故に、資本主義文化は後進國にまで入りこむ。別して、社會關係に關する傾向主張、例へば民主的傾向の如きは、其滲透比較的容易である。これは複雑なる推理と緻密なる考察とを要する學理の如く、又卓越せる能力と洗鍊せられたる趣味とを要する藝術の如く、輸入する爲の困難が大でない。明治の初年、民權自由の思想、スペンサアの學説が如何なる熱意を以て迎へられたるかを想起すべきである。要するに、資本主義國に於て醗酵するところの利益社會的氣風は漸次に後進

國に植ゑつけられる。物質的商品の輸入は必ず文化、傾向、別して利益社會の輸入を伴つた。

利益社會化の傾向が如何につよく平等化の傾向と密接に結びついてゐるか、又資本主義と利益社會化とが如何に密接に結びついてゐるか。これらの點についてはいくたびか詳論した。此點について、本論の説明の十分でない點があるならば、それらの以前の著書について見らるることを望む<sup>5)</sup>。

上に述べたる兩方面の影響を照し合せて考へると、植民的活動が究極に於て如何なる結果に到達するかは明にせられると思ふ。けれども、茲に深く立入り得ない一點について若干の附言を試みたい。

植民的活動の受身に立つもの、云はゞ最廣義に於ける被植民者はその文化的地位から見て、又其集團的實力(別して人口)の上から見て種々のものであり得る。前に述べたるが如き影響を十分に受け得るものは、割合に高き固有の文化を有するものであり、又相當に大なる人口を有し、従つてこの人口を今まで養ひ得た資源を有するものである。文化あまりに低く、人口あまりに少きものは、文明人との接觸によつて屢々消滅する。結核梅毒等の如き侵入病毒の犠牲となるか、又は不毛の地方に追ひつめらるるか、又は其他の壓迫の爲に衰亡する。従つて前述の影響はたゞ文化の相當に高い地位にあるものについてののみあてはまることである。コストはかつて、これに似たることを生物について述べてゐる。生物の進化の段階に於ける差異あまりに甚しきものの混和は生殖能力ある子孫を作り得ぬのに反し、差異の小なるものの混和は甚だ良好なる結果をうむ。

5) 社會關係の研究、大正十五年刊；資本主義の社會學的考察、社會經濟體系(日本評論社)、第十八卷、昭和三年刊、95—117頁。

云はゞ文化の交叉による創造(cross-fertilization of cultures)<sup>6)</sup>が進行する。このユストの主張は、今の點に考へ合せて見るとき、重要な意義を有するものであるが、それにも今立入りて論じ得ない。

## 四

私は直に結論に導きうべき前提をのべた。結論を導き出すことは容易である。けれども、此結論の十分なる意義を意識し得るために、日本經濟の近狀に就いて考へようと思ふ。

シムラ・デリイ會商の意味するところは何であるか。印度産業の自衛的要求と云ふことを切りはなして云へば、それは英國産業の悲鳴であり、日本産業に對する屈服でもある。然らば日本産業のこの優越的地位は如何にして成立したか。

かつて我財界に於ける有力者は日本を以て慢性輸入超過の國であるといつた。これは今までの事實について見るとき、誤れることではない。大戰最中の數年を除いて云へば連年入超に次ぐに入超を以てし、國際收支の決済は外債と償金と若干の貿易外収入とを以て辛うじてつけられてゐる事情にある。このことは勿論一部分、大戰の景氣時代の生活の高上に負ふところもあるが、それに論及することは今の仕事ではない。果して日本の産業は輸出を以て輸入を償ひ得ざるほどに劣等の性質のものであるか。思ふに事實は決してさうではない。日本は産業發達のある段階にゐるために、此段階の特徴として必然的に輸入超過の状態にあつたのである。浦賀灣頭の黒船はべ

6) 社會學原理、一二六二頁；Ward, Pure Sociology, p. 237；Coste, Le facteur population etc. Revue internationale de sociologie, 1901.

ルリが氣まぐれに迷ひこんだのではない。歐米資本主義が外部市場開拓の努力の一表現に外ならなかつたのである。歐洲大戰に至るまでの日本はまづ歐米資本主義商品の需要者であり、ついで其資本の需要者であつた。若干の特産(生絲、茶)や、輕工業的加工品の輸出を以てしては、連年ひきつゞき増大する資本財の價格を償ふべくもなかつた。歐洲大戰によつて歐洲資本主義商品の輸入がたえ、これによつて一轉機がかぎられたやうに見えたのもしばらく、關東大震災による物資の缺乏はなほ輸入超過の時機を長びかせた。漸く一九二九年以來の恐慌に入つてから方向の轉換がはじまりかゝつた。而してやつと金再禁止の結果として、今や完全に輸入超過の状態を脱しようとしてゐる。而して日本産業の世界的征服の時期が始まらむとしつゝある。慢性的輸入超過の状態にあつたのは日本の産業が外國資本の援助によつて發達しつゝある過程にあつたからである。今やかゝる發達過程はすでに完成に達した。日本の産業は今や、歐米資本主義のそれを凌駕しようとしてゐる。けれども一面から考へると、このことはすべて我國民の特別に優秀なる技能性格の結果であらうか、従つてどこまでも永續性をもつものであらうか。私はさう考へない。輸入超過からの轉回は少年が成長して大人となるほどに自然なることではなかつたか。

人人は日本の産業の最近に於ける隆昌を見て、これが原因として數ふべきものには三ある。一は爲替の低落である。二は設備の改善、別して不況時代に行はれたる、而して金解禁からの打撃によつて強化せられたる合理化である。三は最も根本的なるものである、そ

これは即ち生活標準の低さ、従つて勞銀の低さである。所謂米勞銀ライスウエエダである。爲替低落の影響は重要ではあるけれども根本的のものではない。合理化は他の資本主義國に於ても（別して米獨に於て）徹底的に行はれた、日本の努力は日本の設備を世界各國並に改善せしめたと云ふに止まるであらう。決定的なるものは、これが政策的に見て、道德的に見て、いゝにせよ、わるいにせよ、低勞銀である。かく見て來ると日本の産業的勝利の意味を讀むことが出来る。

日本は永く植民的活動の對象であつた。歐米資本主義の商品と資本との吐け口であつた。けれどもその結果として、日本の産業は十分なる資本主義的設備を整ふことが出來た。此陣容は歐洲大戰に入つてほぼ整へられ、近時の爲替の低落によつて完成したと云ひ得る。然るに、後進國の常として、その生活は簡素であり、勞銀は著しく低率である。事業によつては勞働の能率に於て十分でないものもあるけれども、勞銀の低率は優にこれを償ひ得ることになつてゐる。而もこのことは、私見によれば、日本國民の特有なる能力をまちて、又その特有なる民族精神の力によつて、生じたることではない。ただ、資本主義の發達、植民的活動の進行の必然がもたらして來たある段階の事實に外ならぬ。

前に述べたる事情によつて、資本主義の發達は植民的活動を促がし、植民的活動は其受身に立つものの側に於ける産業設備を完成せしめる。資本主義國に於ける生活標準の高く、勞銀の高位にある以上、而して能率の點に於ける差異が減少してゆく以上、二者の間に産業上の競争は行は

れ、同等の設備と低廉なる勞銀とを以て生産し得るものが勝利を得るに至ることは、自然の勢である。かくして、植民的活動に於て受身にあるものは、それが植民地たると否とに論なく、産業發達のある段階までは必然的に慢性の輸入超過國であり、やがては必ず輸出超過、先進國壓迫の態度に轉すべき宿命をもつ。

私は經濟の點をのみ述べて來た。簡單にはあるが他の方面を考へよう。前述の如く植民的活動の進行は畢竟植民地及び植民地ならざる受身の民族に民主的利益社會的傾向を植ゑつける。これが如何なる結果をもたらすやは餘りに明白である。受身のもの、別して植民地は此傾向に驅らるる結果、母國に對する獨立、少くも自治を得ようとする。その爲には持久的反抗の作戰に出づるを常とする。資本主義的文化の浸潤深ければ深きほど此傾向は其力を加へる。此傾向乃至運動は經濟的轉換をまちて強化せらるるであらう。植民地の産業が漸く進歩し、資本主義國のそれと同列に達するに及べば、今や經濟的方面に於て依存し依頼するところは益々乏しくなる。母國の束縛を脱しようとする要求は益々加はるはずである。而して、長い時期をとつて考ふるときには必ず次の如き事情もあらはるるであらう。植民地の側に於ては生活標準の未だ高からざるが爲に、又資本主義文化の普及に於て遅れ個人主義的氣風未だ強くない爲に、それが武力に於て先進國に勝ると云ふことも、自然の勢である。勿論現實に於ては反對の方向に作用する事情もあるから、此傾向が直に實現せられがたいとは云へ。植民地はやがて母國から獨立する傾向を有し、ひいては

それを社會的政治的に壓迫しようとする宿命をすら有する。たゞ此點は本論の主眼でないから、これ以上に論及することを斷念しよう。

## 五

今や資本主義に於ける先進國は日本の爲に壓迫せられつゝある。而も此壓迫は決して偶然のものではない、又日本の策略によつて成就したところでもない。云はゞそれは宿命的である。歐米の資本主義は自己の發展の爲に植民的活動をつゞけた。其目的は達せられ、資本の蓄積はあくまで進行して來た。けれども、植民的活動そのことは今や自己の競争者を仕立上げた。而も此新しき競争者は新鋭なるものであるだけに生活標準の低さと云ふ特別の武器を有する。先進資本主義は容易にこれに及向ふべくもない。たゞこれに對抗する道としては二が殘されてゐる。

云ふまでもなく其一は、政治的方法である。具體的に云へば現に英吉利のとりつゝある方法である。大英版圖經濟は種々なる原因乃至目的をもつにせよ、其實、衰滅せむとする英吉利産業が政治的方法によつて、其版圖の市場を自己のために保留しようとする努力の表現にすぎぬ。それは一時的にはある程度まで奏效するであらう。けれども、それが永續的效果をもち得るものとは思はれぬ。個々の成員が利益の線に沿うて動くことを如何なる國家といへども永久的には防ぎ得なかつた。況んや自治領をも含めたる聯合的統一の力によつて如何なる國家もなし得なかつたことを果し得るであらうか。具體的に云へば印度農民が永久に半分の價格に於て入手し得らるる日本綿

布を買はずに辛抱すると考へ得るであらうか。商品は常に風の如く水の如きものである。如何なる障壁を設くるとも、やがては見えざるすき間を通して侵入する。これは今までの史實の示すところである。版圖經濟の如き制度は非常時の産物としてのみ理解し得る。歐洲大戰の反動としての恐慌がやがて克服せられてしまふ日にはそれもやがて崩壊するのではないか。何れにせよ、政治的方法が衰滅する先進資本主義國の産業を永久に救助し得べしとは考へられ得ない。

かう考へると殘されたる道はたゞ一つである。それは舊き資本主義國に於ける生活の標準、從つて勞銀が後進のそれなみに引き下げらるることである。勿論、此表現には多少粗雜の點もある。前者の設備及び勞働能率がなほ未だ多少とも後者に勝るところがあるとするれば、この差異に應じて前者の勞銀の高いと云ふことは其産業上の競争能力を害ふものではないであらう。又後者の生活標準とても決して一定不動のものではない。自國産業の世界的地位の上昇に伴うて上昇してゆくであらう。要は先進資本主義國がこれらの事情をも併せ考へて、なほ其商品が競争能力を十分にもち得るまでに、勞銀及び其他の勞働條件を低下せしむることである。具體的に云へば、英吉利の勞働者が日本の勞働者と同等なる待遇の下に置かるることである。けれどもこれが可能のことであるか否かは深く考慮するまでもなく明白であらう。これには二の理由がものを云ふ。一、高め上げたる生活程度は容易に引き下げらるるものではない。このことは私の屢々説明したることである。二、西洋文明の特質は自然の征服であり、自己の生活の快適をのみひたすらに追求することである。資本主義文化と云ふものはすべて此根本傾向によつて貫かれてゐる。此文化によつて陶冶せられて成人してゐる英吉利勞働者が容易に其生活低下を實行しうべしとは考へられ

ぬ。別して彼等の政治的實力は相當に強い。彼等に此低下を強ひ得べき政治的壓力は缺けてゐるはずである。かくして、英吉利はその残されたる唯一の道をふむことに多大の困難を感じるであらう。而もこれは單に英吉利の前途に横はつてゐる難關であるばかりではない。すべての舊き資本主義國が通過せねばならぬ難關であると共に、これが通過は彼等の過去、彼等の文化を以てして至難の業であると思はれる。

けれどもこのことは決して日本の産業の永遠なる勝利を意味するものと考へることは出来ぬ。日本の産業はまさにその成熟期に入りたるが故にのみ、世界の各市場に手をひろげつゝある。而も、日本は自分がまた植民的活動を行ふ主體となつてゐる。而して早晚その力によつて、それよりも更に後進的地位に立つところの資本主義經濟が成立し來るであらう。例へば滿洲國に、支那に、而して恐らくは南洋南米の各地に。而もこれらの各地に自己と競争しうる資本主義經濟の成立する場合、日本の經濟は如何なる地位に置かるであらうか。それが英吉利經濟の今日の狀態でないとしたれが斷言しうるであらうか。今、漢民族の人人の生活標準をとりて考へよう。それが如何にわれらのものよりも低いかは、すでに定説の存するところである。工業労働者として、農業労働者として、必ずしも同胞にゆづるものでないことも種々なる點から實證せられうるであらう。若し資本主義的産業の設備が十分に滿洲支那に、而も日本の資本輸出の力によつて、出來上る時、その時日本の商品が今日英吉利の商品の驅逐せらるると同様に驅逐せられぬとは、信じがたいことである。日本の現在には英吉利の如き自給自足の版圖經濟に立てこもりうべき内部の市場も内部の資源もない。従つて政治的に此種の困難を打開し得る方法もないはずである。日本の産業

が來るべき事態に對して自己を守りうる道はたゞ一しかない。其生活標準を高め上げぬことである、産業上の競争能力を失ふほどにこれを上昇せしめぬことである。而もこのことは、日本の産業的地位の高まると共に、恐らくは資本の蓄積が愈々進行すると共に困難となる。

勿論、この生活標準を單に大部分の労働者農民にのみ維持せしめると云ふことは、恐らく出來うべきことでもなく、又望むべきことでもない。國民のすべてが相近き生活標準の上に立つことを覺悟するのではなくては、それは實行しがたいことであらう。けれどもその點に立入るのは今の仕事ではない。なほまた以上の議論はすべて資本主義經濟を前提としてゐるから、此組織を離脱する場合にはあてはまらぬであらうと見る見方もあるであらう。それは一應筋道のたつた意見のやうではあるが、やはり次のことを附言しよう。今まで述べて來たことはなるほど、資本主義經濟について述べて來たことではあるが、やはり同様に資本主義以外の經濟組織をとつた場合についてもまたあてはまる。今日の露西亞が其重工業的施設の完成の爲に、國民に對して如何に低い生活を求めつゝあるかと云ふ事情を考へると、此點は明白になるであらう。國內に於ける營利資本、又は資本財そのものの蓄積は、如何なる場合にも低い生活標準を必要條件とするはずである。

私は今まで述べたるところから結論をひき出し得ると思ふ。植民的活動の主體としての國家は其對象(受身の地位に立つもの)を自己の競争者にまで高め上げる。而も自己の生活標準の高さが故にやがて競争に於て打ちまかされ、産業的に没落する外はない。而もこのことはやがてまた、取り代るところの競争者の運命である(それが生活標準を低位に保たざる限り)。國內に於て支配する階級は次ぎ次ぎに没落して取り代られる。此意味に於て、歴史は貴族の墓である(パレット)。

而も世界歴史に於ては、此貴族の地位を植民者としての國家が占める。従つて歴史は植民國家の墳墓である。若し植民者としての國家にして持續的生命を求めらば、たゞ低き生活に甘ずる外はない。

一 國內部に於ては、簡素なる生活を命令する所の見えざるもの意志は必ずしも強くあらはれない。例へば貧しきものは簡素なる生活を營みて働きつゞけつゞあるけれども、富めるものはいつまでも豪華なる生活を味うて而も仕事もしたくない。貧しく生きよと云ふ指令の意味は長き世代をしらべて見るのでなくては、中々明になりにくい。之に反して、國家間又は民族間の關係に於ては、このこと、極めて明白である。貧しく生くるものは富めるもの驕れるものにとり代る、而も貧しきものが富むとき彼等はまた没落する。人類に於ける選良としての植民國家はかくして周流するであらう。たゞいつまでも貧しく生きうるもののみが支配的地位を永く維持し得る。こゝに必然と道徳との一致が見られないであらうか。

一人、一民族の豊富なる生活は他人、他民族の生活の餘地を奪ふ。簡素なる生活に甘ずることは、それだけ他人に對し、他の民族に對して、生活の餘地を残すことである。何れにせよ、有限の生命は苦患にみちてゐる、他に奪ふことは其苦患を加ふることである。道徳はさうせざることに存する。而して此永遠の道徳を格守し得るもののみが、没落より免れうるであらう。見えざる力の命令するところは平等である。平等であるが爲には簡素の生活を營む外はない。争ひ、親しみ、恵み、戦ひの纖維が錯綜して織りなす人類の歴史の畫布に畫かれてゆくものは、漸く明になりゆく平等の姿である（昭和八年十一月十二日朝九時）。